Press Release

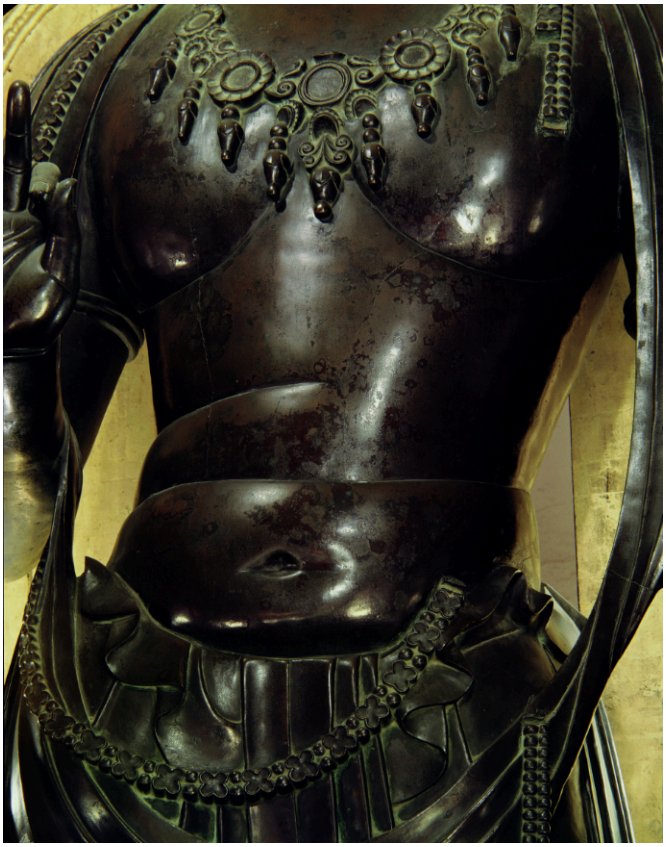
●土門拳記念館の新しい展覧会情報をお知らせします●

土門拳のマチエール！

マチエール

〖名詞〗（［フランス語］matière）材料。材質。特に美術では、さまざまな素材や、その種々の使用法によって作り出された画面の肌および、その材質感のこともいう。

『精選版 日本国語大辞典 3巻』小学館



土門拳《薬師寺金堂日光菩薩立像腹部》
1961年頃

入館料 一般800円 / 高校生400円 / 中学生以下無料
開館 9:00―17:00［入館は16:30まで］

2展同時開催

2024 10.26 sat → 2025 1.19 Sun

会期中の休館日
12/2（月）・9（月）・16（月）・23（月）
12/29（日）～1/3（金）、1/6（月）・14（火）

石川真生《沖縄でバイレイシャル（ミックスルーツ）として生きること》
2021年4月24日、本部町営市場

第43回土門拳賞受賞作品展

石川真生
ISHIKAWA MAO

私に何ができるか
WHAT CAN I DO?

土門拳記念館
Ken Domon Museum of Photography

2025年4月、土門拳記念館の呼称が「土門拳写真美術館」に変わります。

〒998-0055 山形県酒田市飯森山2-13 飯森山公園内
http://www.domonken-kinenkan.jp/
[Tel] 0234-31-0028
[Mail] kendomon.mop@gmail.com（田中）

画像提供や詳細情報に関するお問い合わせは、左記までご連絡ください。

Press Release

●土門拳記念館の新しい展覧会情報をお知らせします●

1

2

3

4

第43回土門拳賞受賞作品展

石川真生
ISHIKAWA MAO

私に何が
WHAT CAN I DO?

できるか

第43回土門拳賞は、1970年代から一貫して沖縄と沖縄の人々を撮影し続けている石川真生氏の写真展「石川真生　私に何ができるか」（東京オペラシティ　アートギャラリーにて2023年に開催）が受賞しました。この展覧会では、黒人米兵を顧客とするバーで働きながら、同僚の女性たちと黒人兵士との交友を撮影した初期作品から、琉球史のさまざまなシーンを友人知己に演じてもらった創作写真と米軍が存在し続ける沖縄の現在に迫るドキュメンタリーとで構成される『大琉球写真絵巻』まで、約50年間の作品166点を展示。当事者として状況に身を投じその場を浮かび上がらせた写真とともに、半世紀以上一貫して撮り続ける意志が高く評価され、今回の受賞に至りました。土門拳記念館における受賞展では、その中から厳選された21点を展示いたします。

協力：東京オペラシティ アートギャラリー
沖縄県立博物館・美術館

受賞のことば

第43回土門拳賞を受賞させていただき誠にありがとうございました。沖縄を拠点にして、沖縄をとり続けてきた私にとっては励みになる賞です。沖縄からは私が初めての受賞だそうで、その点も良かったと思っています。

撮影：喜友名逸郎

石川真生　ISHIKAWA MAO

1953年、沖縄県大宜味村生まれ。1970年代から写真をはじめ、WORKSHOP写真学校東松照明教室で写真を学ぶ。沖縄を拠点に制作活動を続け、沖縄の人々に密着した作品を制作している。国内外で広く写真を発表し、沖縄県立博物館・美術館のほか、東京都写真美術館、福岡アジア美術館、横浜美術館、ヒューストン美術館（アメリカ）、メトロポリタン美術館（アメリカ）など、パブリックコレクションも多数。主な受賞に、さがみはら写真賞（2011年）、日本写真協会賞作家賞（2019年）、芸術選奨（2024年）、写真の町東川賞国内作家賞（2024年）など。近年の主な展覧会に、沖縄県立博物館・美術館（2021年 / 個展）、東京オペラシティ アートギャラリー（2023年 / 個展）、釜山ビエンナーレ2024など。

1.《大琉球写真絵巻》 パート2 - 1　2014 - 2015

謝名利山は琉球國の三司官（3人制で行政の最高責任者）のひとりだ。1609年4月、薩摩が琉球へ侵略。武器を身に帯びる習慣のない琉球は刀や鉄砲を持つ薩摩軍に惨敗。尚寧王や利山らは薩摩に連行された。薩摩は琉球に対する政策を15条にまとめ調印を強制し、尚寧王らは署名し琉球へ帰された。だが、「琉球の自由なくして生きるかいなし」として、利山ただひとりが署名を拒否し処刑（斬首）された。

2.《大琉球写真絵巻》 パート1 - 10　2013 - 2014

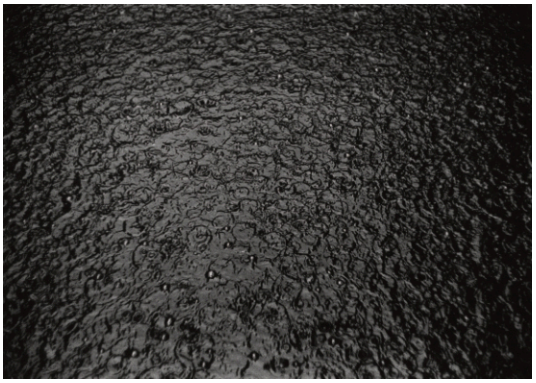
沖縄戦。1945年6月、糸満の摩文仁の海岸まで米軍に追いつめられた日本軍。県民の4人に1人が殺される悲惨な戦争だった。

3.《大琉球写真絵巻》 パート1 - 20　2013 - 2014

安倍晋三首相が憲法9条を無視し、国会での議論もなく閣議決定だけで「集団的自衛権」を推進。

4.《沖縄芝居 ― 仲田幸子一行物語》　1977 - 1992

仲田幸子（1933–）劇団でいご座座長。三枚目が当たり役、1978年頃


1

2

3

土門拳のマチエール！

写真家・土門拳（1909 - 1990）は幼い頃から多くの書物を読み漁り、古今東西の美術に強い関心を抱いていました。青年期に憧れていた画家の道は19歳の頃に諦めたものの、後年に写真家として大成してからも、しばしば美術的・絵画的な視点から写真について語っています。そうした中で土門が頻繁に使った言葉の1つが「マチエール」です。本来は西洋絵画における絵具の質感を指すために使われることが多いこの単語を、土門は写真に関する言説の中でよく用いました。たとえば、「マチエールの問題こそ近代油絵の重要な課題であると同時に、油絵とは全く違った意味で近代写真の重要な課題だと思う」「マチエールをつかむということは、写真的肉体を形成するということなんだ」といった土門の言葉からは、彼にとってマチエールという概念が極めて重要だったことが窺えます。

また、仏像の“へそ”について「指をつっこんでくすぐってみたい」と語ったり、風景写真に関する持論を述べる際に「手でつかめる風景」という独自の概念を用いたりするなど、被写体や写真を巡る彼の思考の中にはしばしば触覚的な感覚が表れています。土門が得意としたクローズアップ撮影――物質が持つ質感を局所的に強調する手法――なども、そうした志向の表れだったのかもしれません。本展では、「マチエール」「質感」「触覚」などをキーワードに、多様なジャンルの土門作品を横断しながらその特性を再考します。

学芸員のほぼ月イチギャラリートーク
11/2（土）・12/14（土）・1/11（土）いずれも14:00 –
要予約・要入館料

1.《どじゃぶり　東京築地》1955年
2.《皮膚に関する八章　第五章　痛点》1948年
3.《西芳寺書院前四半石》1965年頃